短大生に向けての日本語表現指導
－実践指導をとおして見えてくる課題とその対処法－

増田榮美　　斎藤直人　　大橋敦夫
MASUDA Emi　　SAITO Naoto　　OHASHI Atsuo

キーワード：日本語表現・日本語表現指導・レポート・卒業論文

はじめに

情報機器の進展は目覚ましい。それは、我々の言語生活と密接に結びついている。携帯電話（ガラケー）から一歩進んだスマートフォンは、すでに誰もが所有しているかのように社会全体が動いている。教育現場でのICT活用も促されていたが、コロナ禍で、さらにそれが加速している。

これまで、「話し言葉と書き言葉」に２区分して考えていた言語表現に、「打ち言葉」（Eメールの文体）が加わる時代となった。教室にいる学生の多くは、手紙・はがきは、ほとんど書かない、固定電話も使ったことがない、しかし、メールのやり取りは頻繁に行なっている。

そんな「打ち言葉」の時代に生きる学生への、日本語表現指導の在り方を探る。

１　必修科目「日本語表現」の位置づけ

本学の総合文化学科は、国文科を前身とする。国文科時代以来、専門科目の学びに加え、司書課程・教職課程を設置し、所定の単位を取得すれば、司書資格・中学校教諭二種免許（国語）・学校図書館司書教諭資格が取れるカリキュラムを特色としている。学科名が変わり、専門科目の展開分野は大きく変わったが、日本語日本文学の学びをベースに置くという方針を堅持している。その姿勢を明確にうちだすため、共通教育科目（教養科目）の基礎科目に「日本語表現」を必修として位置づけた。専門科目の広がりは８フィールド[1] に及ぶが、どの分野においても、日本語による表現は欠かせないからである。

具体的には、学生は入学後、次のような流れで、表現についての学びを展開することになる。

１年前期：「スタディスキル」（必修）・「日本語表現」（必修）・「基礎ゼミナールⅠ」（必修）
１年後期：「基礎ゼミナールⅡ」（必修）・「言語表現技術」（選択）
２年前期：「卒業研究ゼミナールⅠ」（必修）
２年後期：「卒業研究ゼミナールⅡ」（必修）

言語の４技能（話す・聞く・書く・読む）に即して、上記科目のシラバス内容を見ると、次のようになる。

「スタディスキル」……「読む・書く」：文献の探し方・読み方・レポートの書き方
「日本語表現」……「話す・書く」：敬語・電話応対・手紙・評論等
「言語表現技術」……各自の伸ばしたい技能を個別指導する
「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」……「読む・話す・書く」：文献の読み込み・発表と討論レポート等
「卒業研究ゼミナールⅠ・Ⅱ」……「読む・話す・書く」：研究論文の作成

高校までの学びをふまえ、社会人デビューに備えた言語表現力を鍛えつつ、研究論文の作成を実践していく流れである。

次章からは、日ごろの実践活動から浮かび上がる学生の実態と、その対処法・指導法について、具体的に挙げていくことにする。

２　学科として実施している指導の一例

１年次に開講する「スタディスキル」や「基礎ゼミナール」などの科目により、文章表現の理論や方法を学び、実践を行っている。それに加えて、「信州総合学」（１年後期・必修）を筆頭に８フィールドの専門科目を学修して、２年次の卒業研究のテーマ設定を各学生が行っている。

まず、１年次「基礎ゼミナール」の指導の際に活用している「レポートのルール」（後掲）及び、２年次「卒業研究ゼミナール」で卒業研究の概説を行っている「卒業研究要項」を紹介する。

「レポートのルール」では、レポート作成の手引きとして以下４点が記載されている。①レポートにおいて求められること、②文法上のルール（主語を明確にする・主語・述語の一致・語尾の統一・接続詞）、③禁止事項、④表記について（英数字・フォント・体裁について）である。

入学後間もなく複数の科目でレポートが課されるため、レポート作成の方法を学ぶことは必須といえよう。

つぎに、「卒業研究要項」では「レポートルール」に記載された内容に加えて、①卒業研究提

出日時・方法、②執筆方法、③題目作成方法、④目次作成方法、⑤研究倫理（引用と出典明示・アンケート調査の手続き）が詳述されている。

１年次「レポートのルール」を踏まえたうえで、２年次「卒業研究要項」へと発展する構成となっている。

３　学生指導の傾向

１年次前期「基礎ゼミナールⅠ」では、「レポート・論文の書き方」を２～３時限にわたって指導している。論文の構成をはじめ、文法や表記、引用・脚柱について資料を配布して説明し、期末考査に向けて、大学におけるレポート、論文の書き方を学ぶ。それを踏まえて１年次後期「基礎ゼミナールⅡ」では、自分でテーマを探して資料を集め、パワーポイントを作成して中間発表を行い、実際に簡単な論文を執筆することで、２年次の必修である卒業研究に備えることになる。

しかし、２年次に卒業研究の指導をすると、引用・脚注の方法がわからない学生がほとんどである。卒業研究ゼミナールでは、研究倫理について資料を配付して指導しており、その中には引用の方法について詳細に記されている。それにも係わらず、論文指導をすると正確に引用されていることはほとんどない。理由として、「引用」の意味が理解できていないことにあると考えられる。脚注についても同様のことがいえる。また、文章力が乏しいため、自分で考えて文章を書くのではなく、引用を多用している点も気になるところである。参考文献やサイトなどから文章をコピーして、文末を直す程度の訂正を加えていることが窺える。そのため、文末に「思う」「‥‥‥だろう」「感じた」を多用しており、表現力が乏しい。

デジタルネイティブ世代であるため、参考文献がほとんどWeb上のホームページやブログであることも特徴の１つであるといえる。ブログや企業運営のWebマガジンなどでは、一字下げがされていない文章が多いため、その影響として、学生の書く文章もインデントが置かれていないケースが散見される。また、敬体と常体が混在していたり、体言止めが多いのも、ブログなどを引用していることに起因していると思われる。

１つのセンテンスが長すぎて、主語と述語の辻褄が合わない文章や、複数の主張や話題が含まれているパラグラフ、読点が全くない文章なども目立つ。自分の主張したいことを明確に区分し、文章の内容をしっかり理解してどこで区切るかを検討する必要があるが、それができていない。

４　指導の実際

２年次後期に入ると卒業研究の執筆を始めるため、指導は個々に行っている。執筆を始めてからまず目立つのは、何からどのように書けば良いのか理解していない学生である。既に収集

してある参考文献を基に、前期末には論文のアウトラインを作成しているが、それを基にどのように記述すればよいか、文章表現の方法がわからないのである。解決方法として、以前は先行研究の論文や文献などを参照するよう指導していた。しかし、学生にとっては難易度が高いことがわかり、より身近な卒業生の卒業研究集を参考にしてもらうことにしているが、それでも書けない学生がいるのが実情である。

論文の添削は、締め切りの20日前に、Wordのデータを提出してもらい、校閲機能を使用して行っている。文法や表記の間違いを訂正してしまうのは簡単だが、それでは学びに繋がらないうえに、本人の個性が活かされない文章になる可能性もある。しかし、加除訂正をせず、コメント欄に間違いを指摘して直すように指示をしても、どのように直したら良いかわからず、ほとんど改善されないまま再提出されることが多い。そのため、教員が間違いを直して書き加えたものを参考にしてもらうようにし、他の文章を直してもらうことにした。下記はその一例である。データを示すにあたり研究倫理審査会に申請して許可を得、個人が特定されないよう配慮して掲載するものとする。

【学生の論文の一部】

「ここで、映画として黒人差別を題材にした作品を見ることで、文字を書いて勉強するだけではなく、映像を使って自分がこの作品を視聴してどう思ったのかを考えていくべきなのではないだろうか。様々な人種や文化と関わるようになり、グローバル化が進む中、その中で偏見を持ち、人種差別を行うことになってしまえば、それは差別をすることから抜け出すことはできないものだと推測している。大人が偏見に対して考え、子供達に偏見を持たない環境と教育を、そして差別をしない世界を作ることが求められていると考える。次の世代となる子供達に偏見を抱かせないための教育が重要になるお互いを知り・・・・・・」

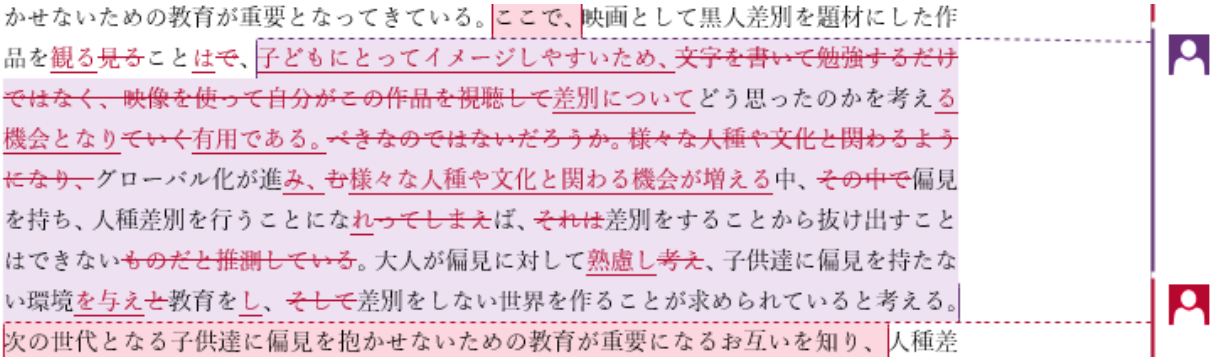

かせないための教育が重要となってきている。ここで、映画として黒人差別を題材にした作品を観る~~見る~~ことは~~で~~、子どもにとってイメージしやすいため、~~文字を書いて勉強するだけではなく、映像を使って自分がこの作品を視聴して~~差別についてどう思ったのかを考える機会となり~~ていく~~有用である。~~べきなのではないだろうか。様々な人種や文化と関わるようになり、~~グローバル化が進み、~~で~~様々な人種や文化と関わる機会が増える中、~~その中で~~偏見を持ち、人種差別を行うことになれ~~ってしまえ~~ば、~~それは~~差別をすることから抜け出すことはできない~~ものだと推測している~~。大人が偏見に対して熟慮し~~考え~~、子供達に偏見を持たない環境を与え~~て~~教育をし、~~そして~~差別をしない世界を作ることが求められていると考える。次の世代となる子供達に偏見を抱かせないための教育が重要になるお互いを知り、人種差

図１　添削の内容①

【コメント内容】（上記添削内容の右サイドにあるコメントマーク内の記述）

「この接頭語は不適切です。」

「自分で書いた文章と添削後の文章を読み比べてください。元々の文章では意味が伝わりにくいし、流れも悪い。言いたいことをよく整理して記述しないと内容がよく伝わりません。以下、全文見直しましょう。」

このように加除訂正した部分を明確にすることで、どのように直したらよいかわかるようになる。全てに添削を加えると、文章を構成する力がつかないため、コメント欄に何が良くないかを明記し、残りは自身で見直すことを求めている。

下記は、主語と述語の辻褄が合っていないケースである。

【学生の論文の一部】

「本研究全体を通して、感染拡大の中結婚式にも大きな影響を及ぼしている。」

【コメント内容】

本研究は結婚式に影響を及ぼしていない。主語と述語がバラバラです。

「本研究を通して‥‥‥ということが明らかになった」などと書くべきでしょう。

この場合も、簡単に直してしまうのではなく、コメント欄での指摘にとどめて、学生自信で書き直すことが重要だと考えている。

また、根拠が示されず自身の主張を記述するケースも目立つ。下記はその一例である。

【学生の論文の一部】

「コロナウイルスが終息したとはいえ３密を避けた結婚式が主流となってしまうが、 コロナウイルス流行後からの結婚式ではできなかったことをできるようスタッフ‥‥‥」

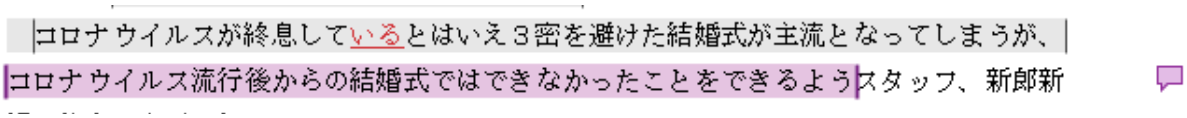


図２　添削の内容②

【コメント内容】

新型コロナが終息したと仮定し、その際主流となる根拠は何ですか？

後半の文章では何が言いたいのか意味が伝わりません。わかるように書き直してください。

論文の書き方について学んではいるが、元々の文章力や語彙力が高くないため、意見を述べる場合や、提言する場合の文章では、文末がほとんど「・・・・・・だろう、・・・・・・だろうか」となってしまう傾向がある。

以下にその文例を示す。

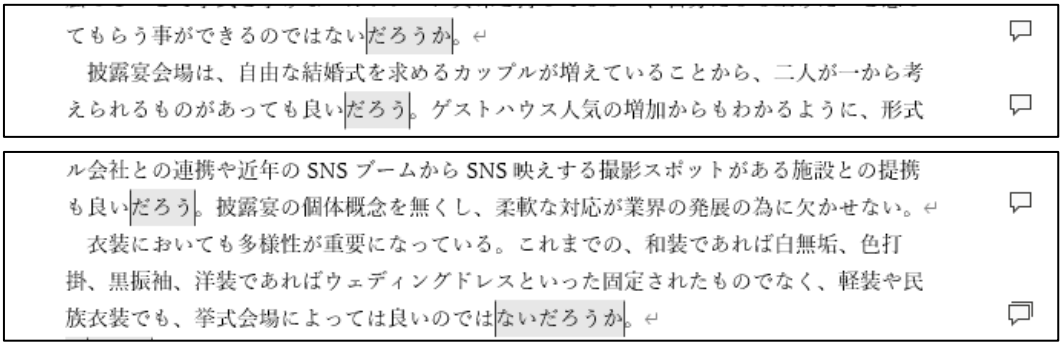
【学生の論文の一部】

「・・・・・・もらう事ができるのではないだろうか。

・・・・・二人が一から考えられるものがあっても良いだろう。・・・・・・

・・・・・・レンタル会社との連携や近年のSNSブームからSNS映えする撮影スポットがある施設との提携も良いだろう。・・・・・・

・・・・・・といった固定されたものでなく、軽装や民族衣装でも、挙式会場によっては良いのではないだろうか。」


てもらう事ができるのではないだろうか。
披露宴会場は、自由な結婚式を求めるカップルが増えていることから、二人が一から考えられるものがあっても良いだろう。ゲストハウス人気の増加からもわかるように、形式

ル会社との連携や近年の SNS ブームから SNS 映えする撮影スポットがある施設との提携も良いだろう。披露宴の個体概念を無くし、柔軟な対応が業界の発展の為に欠かせない。
衣装においても多様性が重要になっている。これまでの、和装であれば白無垢、色打掛、黒振袖、洋装であればウェディングドレスといった固定されたものでなく、軽装や民族衣装でも、挙式会場によっては良いのではないだろうか。

図３　添削の内容③

【コメント内容】

「・・・・・・だろうか」という疑問形は極力使わない。以下見直してください。

「・・・・・・だろう」で終わる文章が多すぎます。「推察される、窺える、予想できる、示している」など、使い分けましょう。すべて見直してください。」

５　まとめ

学生は論文を執筆することになれていないこともあり、卒業研究を仕上げるまでには多くの時間をかけなければならない。最初に提出された論文の文章表現は、本稿で記述した通り、現代の学生に特徴的な表現が多く見られ、書き直すことが求められる。添削の際、教員が全てを書き直してしまえば、文章表現の学びの深化に繋がらないうえ、論文における学生の個性が失われる可能性もあるため、例文を示して、学生自身が再考できるような工夫が必要である。

しかし、丁寧に添削し、アドバイスを加えれば、格段に充実した内容の論文が仕上がってい

る。これこそが、卒業研究を通じた日本語表現の学びの深化である。

１年次から学んできた文章表現を、実際に生かす場面が少ないことが、論文を執筆する際の戸惑いに繋がっていると考えられる。文章を書くことが少なくなっている現代においては、さまざまな場面で文章を書くことに重点を置いた教育を行い、卒業研究に繋げていくことが肝要であろう。

【参考文献】

学習技術研究会編、『知へのステップ　大学生からのスタディ・スキルズ』、くろしお出版、2002年.

注

[1] 日本語コミュニケーション、日本文学、表現、文化学、ブライダル、心理・人間関係、図書館司書、ビジネス・医療事務の８フィールドがある。

添付資料

レポートのルール

1.　レポートにおいて求められること

「基本的な日本語を解釈できる能力がある人（義務教育修了程度）であれば、誤解なく理解できる正確な日本語を書くこと」

2.　文法上のルール

①　主語を明確にする
「書かなくても分かるだろう」は、読者である教員への好意に期待しすぎた態度である。指示語も多く用いると読む側が混乱するので、省略せずにはっきりと書くことが重要である。

②　主語・述語の一致

③　語尾の統一
「である」か「です・ます」かどちらかにする。同じ文章で混ぜない。

④　接続詞
特に逆接の接続詞を多く使わないようにする。「しかし」が連続すると文意が取れない。

3.　禁止事項

①　体言止めの禁止
レポートはエッセイや小説ではなく、正確な日本語を記述することが重要である。

②　語尾「だ」禁止
くだけた表現になるので禁止する。「である」または「です」にする。

③　口語使用の禁止
「だから、なので、みたいな、で、でも、いろんな等」
→「であるので、よって、しかしながら、色々な等」

4.　表記について

①　英数字
英数字は半角にする。ただし、漢数字はその限りではない。
×１２９０　→　1290

②　フォント
日本語フォントは、本文はMS.明朝体、見出しをゴシック体にする。英数字はCenturyまたは Times New Romanにする。

③　体裁について
・1ページ目に所属、学籍番号、名前を明記する。